

[連載]第24回 清々しき人々

権威に対抗した偉大な植物学者

牧野 富太郎 月尾 嘉男

(東京大学名誉教授・工学博士)



Wikimedia Commons

牧野富太郎 (1862-1957)

生物を命名する方法

地球は生命の惑星といわれることがあります。実際、陸上、海中、空中などあらゆる場所に生物は棲息しています。しかし、どれくらいの種類の生物が存在しているかについては意外にも正確な数字が存在していません。国際連合環境計画などが約八七〇万種の生物が生息しているという数字を発表していますが、約一三〇万種の誤差があるという程度の推定です。大略の内訳は動物が七八〇万種、植物が三〇万種、菌類が六〇万種です。

しかし、そのうち人間が発見した生物は二五万種から一七五万種でしかなく、大半は人間が発見した生物は哺乳動物が六〇〇〇種、鳥類が九〇〇〇種、昆虫が九五万種、植物は二七万種程度ですが、これらには一定の規則によって学名が付与されています。その命名の規則は一八世紀に活躍したスウェーデンの博物学者カール・フォン・リンネが一七三五年に出版した『自然の体系』を提案しています。生物の分類は動物、植物、菌類と分類する大枠の「界」から出発し、次に「門」「綱」「目」「科」「属」「種」と細分していく体系で分類されています。一例としてヒトは「動物界」「脊索動物門」「哺乳綱」「サル目」「ヒト科」「ヒト属(ホモ)」そして種は「サピエンス」となります。この最後の分類の「属」と「種」を、当時の科学分野の共通言語であったラテン語で表記するというのがリンネの提案した方法で「二命名法」といいます。

高知の商家に誕生した植物学者

生物の命名の権利は新種を発見した人間に付与されますが、植物については、生涯に六〇〇種以上の新種を発見し、それらに命名した植物学者牧野富太郎を今回に紹介します。四国の高知からJR四国の土讃線で西側へ一四番目に佐川という駅があります。明治維新直前の一八六二年に、当時は土佐国佐川村(高知県佐川町)の酒造と雑貨販売を家業とする「佐川の岸屋」で通用する裕福な商家に長男として誕生したのが富太郎でした。不幸なことに、富太郎が三歳のときに父親の佐平が、五歳のときに母親の久寿が、六歳のときに祖父の小左衛門が病死し、祖母の浪子に養育されます。祖母はきわめて寛容な性格で、番頭が富太郎のために購入してくれた当時は貴重な時計を分解してしまったときも叱責しなかつたという逸話があります。一〇

歳になった一八七二年に地元土居謙蔵が運営する寺子屋に入塾し、勉強においても運動においても目立つ存在に成長していきます。さらに翌年、伊藤徳裕の運営する伊藤塾で漢籍を、佐川藩深尾家の藩校の名教館で英語、数学、物理、経済など西洋の学問を勉強します。一八七四年には学制発布によって名教館が佐川小学校になり、そこへ通学しますが、授業に満足できず二年で退学してしまいます。その時期から植物採集に興味をもち、「重訂本草綱目啓蒙」「救荒本草」などの辞書で植物の名前を暗記し、実際の植物の写生もし、植物学者になる基礎を蓄積していきます。

一八八四年には再度東京、大田にも日本の植物研究の頂点にある東京大学理学部植物学教室に矢田部良吉教授と松村任三助教授を訪問し、教室に入塾して文献や資料を自由に閲覧していいという許可まで取得します。矢田部は明治初期にアメリカのコーネル大学に留学した植物学教室の初代教授になった後、松村はE・モースの大森貝塚発掘に参加した学者ですが、それから大物を躊躇せず訪問したこと、富太郎の情熱が感得できま

また、一八八一年、東京の上野で開催された第二回内国勸業博覧会の見学と書籍の購入のために上京し、上野の博物館長や農商務省博物局長を経験した田中芳男などに面会し、帰郷は日光、箱根などで植物採集をして帰郷、さらに地元でも高知の西端の足摺から柏島にまで植物採集のために遠出しています。物怖じしない性格で、当代の著名な植物学者である伊藤圭介に質問の手紙を送付するなど、植物の研究に本格投入していきます。

さらに大胆なことに、二五歳になった一八八七年、植物学教室の大久保三郎、田中延次郎、染谷徳五郎たちと共同で『植物学雑誌』を創刊し、自身で巻頭論文を執筆します。この雑誌は現在も日本植物学会から継続して発行されており、日本で最古の植物学誌となっています。そして翌年には小澤寿衛と結婚して、植物の根柢に居住するとともに、『植物志図篇』を自分で図版を描写し、自費で刊行を開始します。

大学との確執で波乱万丈
このような行動が可能であった



図1 ムジナモ



図2 スエゴザサ

月刊新聞「MORGEN」購読のご案内

MORGENは、先生と生徒が共有する、読書を柱とした、人間の生き方を考える新聞です。生徒会担当教諭、図書館担当教諭を通して生徒に配布しています。読書や社会情報を通し、子どもたちの視野を広げ、自ら社会の一員である自覚と、ものごとを客観的に見、聞き、考える目と心を育てることを目的としています。

中学・高校の授業など、教育現場でも活用されています
読者対象:小・中・高校教諭、中・高・大・専門学校生 月刊紙・タブロイド判

購読費(年間購読)

324円×11回(年間11回発行 7-8月は合併号) → 3,564円(送料込)
※一部売りは540円(税込)

- ★購読費を限費でお支払いいただいている学校さんもあります。県への依頼送付書などはこちらでご用意できますので、ぜひご相談下さい。
- ★教育機関には1部料金で複数の送付ができます。お気軽にご相談下さい。
- ★年度途中でのお申込みも可能です。

お問合せ: MORGEN編集部 〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町5-5-1F
TEL 03-5361-3255 FAX 03-5361-1155 HP http://yugyosha.web.fc2.com/

推薦図書

「これは水です」

『これは水です』 David Beer Walker
早世のモダン文学の旗手、デヴィッド・フォスター・ウォレスの大学卒業スピーチ完訳版。副題「思いやりのある生きかたについて大切な機会に少し考えてみたこと」。人生は無意識的でなく能動的に生きてはじめて豊かになる、というものをリベラルアーツの有用性を軸に平易に説く。奇しくも、ジョブズと同年の出来事。デヴィッド・フォスター・ウォレス/著 阿部重夫/訳 田畑書店/刊 定価1,200円(税別)

「その後の福島 原発事故後を生きる人々」

『その後の福島』 原発事故後を生きる人々
「ルポ 母子避難——消されゆく原発事故被害者」など、自身二児の母であり、原発と母親をフォーカスし続ける著者の最新刊。事故から7年目を迎え、いよいよ風化されようとする福島と被災者のその後を追う。「避難指示を解かれて」「除染の現実」「賠償の現実」「借上住宅の打ち切り」「集団訴訟に託すもの」……語られない戦慄と憤激の現実がここにある。吉田千亜/著 人文書院/刊 定価2,200円(税別)



図3 牧野日本植物図鑑(1940)



理由はともかく、東京の拠点
を喪失した富太郎は実家の家財
整理のために一旦帰郷し、地元
の植物を研究していましたが、
知人らの助力により、二年が経
過した一八九三年に東京の駒場

ところが、学者として成果を
発表しはじめた時期に、矢田部
教授より植物学教室への出入を
禁止されてしまいました。表向き
の理由は大学でも植物図鑑を発
行するから勝手に書物や標本を
閲覧することを禁止するとい
うことでしたが、富太郎が
東京大学教授という日本で最高
の地位にある矢田部教授に相応
の敬意を表明しないことや、富
太郎が大学の多数の蔵書を長期
に借用して返却しなかったこと
などもさされていきます。

たのは実家の財産の恩恵ですが、
東京と高知を頻りに往復し、費
用がかかる図鑑を自費で出版す
るなどしていたため、実家は完
全に没落していき、富太郎はよ
うな事態にもかかわらず植物採
集に熱中し、一八九九年にはマ
トグサと命名する新種の植物
を発見して「植物学雑誌」に発
表、さらに翌年には世界各地に
隔離分布するムジナモを東京で
発見(図1)、それを学術論文
として発表したことにより有名
になります。

図4 高知県立牧野植物園



に創設された帝国大学農科大学
で研究が継続できるようになり
帰京します。さらに矢田部教
授が退任して主任となった松村
教授から帝国大学理学部大学に
給一五円の助手として採用され
ようやく一息つくことができる
ようになりました。

この夫人は井伊直弼の系譜の
武家の出自とされ、夫婦には一
三人の子供が誕生し、六人が成
人になっていますが、料亭の経
営による収入で東京都大泉村
(現在の練馬区東大泉)に七〇
〇坪の土地を借地として入手し
晩年の富太郎の研究場所を確保
しています。しかし富太郎が理
学博士を授与された一九二七年
に夫人は原因不明の病氣になり

ですが、満足に入院費用も支払
えなかったために手遅れとなり、
翌年二月に五四歳で死亡してし
まいました。
以下は有名な逸話ですが、富
太郎は夫人の患部を研究のため
に大病院に寄贈するとともに、
前年に仙台で発見した新種のサ
サを「ササエラ・スエオアナ」
と命名し、夫人の名前が永遠に
記憶されるようにしました(図
2)。遺骨は東京の谷中の墓地
に埋葬し、墓石の側面に「家守
りし妻の恵みやわが学び/世の
中のあらん限りやスエオササ」
と記載しています。このスエオ
ササは夫人が土地を用意した自
宅の庭園にも移植されています。

図5 牧野記念庭園



このような不遇の生活にもか
かわらず、研究意欲は旺盛で、
大学への出入禁止のため、六巻
まで出版したものの未完であっ
た『日本植物志』を一九〇〇
年刊行します。今回は自費
ではなく帝国大学から費用が提
供され、丸善から刊行されま
したが、これも様々な事情によ
り四巻で中断してしまいました。
このような挫折もありましたが、

この研究一途の性格を証明す
るように、各地に植物採集に出
掛けるとともに、「植物学研究
誌」の創刊(一九一六)、「日本
植物総覧—日本植物図鑑」(二
五)、「頭註国訳本草綱目」(二
九)、「牧野植物学全集」(三三)、
「牧野日本植物図鑑(四一)」、
「植物記」(四三)などを次々
に刊行、戦後「牧野植物図鑑」
(四七)、「図説普通植物検索表」
(五〇)などを発刊しています。
そして四八年には皇居に参内し
昭和天皇に植物学御進講もして
います。

満足に入院費用も支払
えなかったために手遅れとなり、
翌年二月に五四歳で死亡してし
まいました。
以下は有名な逸話ですが、富
太郎は夫人の患部を研究のため
に大病院に寄贈するとともに、
前年に仙台で発見した新種のサ
サを「ササエラ・スエオアナ」
と命名し、夫人の名前が永遠に
記憶されるようにしました(図
2)。遺骨は東京の谷中の墓地
に埋葬し、墓石の側面に「家守
りし妻の恵みやわが学び/世の
中のあらん限りやスエオササ」
と記載しています。このスエオ
ササは夫人が土地を用意した自
宅の庭園にも移植されています。

数々の栄誉を授与さ れた晩年

五〇歳になった一二年には東京
帝国大学理学部教授に任命さ
れます。
しかし学歴至上主義の当時の
大学では、富太郎を講師にして
おくことに何度も反対がありま
したが、帝国大学に必要な人材
とされ、七七歳になった一九三
九年に辞表を提出するまで留任
しました。助手の時代から計算
すれば四七年間も在任した異例
の経歴でした。このような確執
の一端は研究一途の富太郎の性
格にも関係があり、松村教授に
ついて、明治の植物学研究者の第
一人者で、東京大学植物学教室
の基礎を構築した学者であると
賞賛しています。

さらに生涯に発見した新種は
六〇〇種以上、命名した植物は
約二五〇〇種という活躍でした。
そのような業績は戦後になって
一気に評価され、一九五〇年に
は日本学士院会員に推挙、五一
年には第一回文化功労者に選定
され、九四歳で永眠した五十七年
は勲三等旭日重光賞と文化勲章
も授与されています。富太郎は
「私は草木の精である」と日頃
から発言していましたが、それ
を証明するのに相応しい人生で
した。

設置して整理を開始し、富太郎
が逝去した翌年には高知市五台
山の一八ヘクタールの土地に高
知県立牧野植物園(図4)、や
はり同年に東京都練馬区の富太
郎の晩年の二〇〇平方メートル
の住居の跡地に牧野記念庭
園(図5)が創設されています。
植物一筋に人生を投入した業績
の偉大さを象徴する施設です。



つぎお よしお
1942年生まれ。1965年
東京大学工学部卒業。工学博士。
名古屋大学教授、東京大学教授
などを経て東京大学名誉教授。
2002、03年総務省総務審議
官。これまでコンピュータ・グ
ラフィックス、人工知能、仮想
現実、メディア政策などを研究。
全国各地でカヌーとクロスカン
トリースキーをしながら、知床
半島、羊蹄山麓、釧路湖、瀬戸
内海などを中心に、地域の有
志とともに環境保護や地域計画
に取り組み。主要著書に「日本
百年の転換戦略」(講談社)、「日
小文明の展覧」(東京大学出版
会)、「地球共生」(講談社)、「地
球の救い方」(水の話)(遊行社)、
「100年先を読む」(モロゾシ
1研究所)、「先住民の叢書」(遊
行社)、「誰も言わなかった一本
当は恐いビッグデータとサイバ
ー戦争のカラクリ」(アスキー)、
「日本が世界地図から消滅しない
ための戦略」(致知出版社)、「幸
福実感社会への転換」(モロゾシ
1研究所)など。最新刊は「転
換日本 地域創成の展望」(東京
大学出版会)。

編集後記

いま朗読劇「線量計が鳴る」を演じ
るのは中村敦夫さん(78)だ。
1972年テレビ放映の一躍ブームに
なった「木枯し紋次郎」をご存知の方
も多いことだろう。中村さんは人気ス
ターになると数々のドラマで主演を
つとめ、その後テレビ情報番組のキャ
スターを務めるなど知性派としての
姿もみせていた。
暫くして1998年には参議院選挙
に立候補して当選。議員としては「公
共事業チェック議員の会」会長や環境
委員などで活躍した。「木枯し紋次郎」
なみの正義の持ち主の姿を見せた。
政界を引退した後は文章活動や講演
会、朗読劇などに表現の場を広げて
いった。
2011年東日本大震災の地震・津波
そして原発事故以来、現実的な原発の
危険性が一般に広く理解されるには



どうしたら良いのかと、苦悶し考える
日々を送っていた。そこで試行錯誤の
果てにたどり着いたのが朗読劇とい
う表現方法だった。
一人で道具を背負い、日本各地で上
演し、既に40回を終えた。百都市の
公演が目標というが、その姿はまさに
孤高の「木枯し紋次郎」の姿だ。
朗読劇の内容は東北弁で語られる
実証的な情報に、人々は原発の実態を
知らされる。
中村さんは原発と向き合うために
一から学び直し問題全体を理解する
必要を感じた。そして福島現場にも
いった。チェルノブイリも訪ねた。資
料を読み込み専門家のアドバイスも
受けた。しかし、そうしているうちに
どんどん時間が過ぎ、焦りも感じてい
たという。納得するまでに試行錯誤もし
た。そしてやっと原発事故から5年
後表現方法を思いついたのだ。
原発立地で生まれ育ち、原発技師と
して働き、原発事故で全てを失った老
人の独白だ。
この独白は予想を超えた力で聞く
者の心を捉えて離さない。福島を原発
を真剣に考える機会になることは間
違いないようだ。(H)

10月号 平成30年10月9日発行
●編集 モルゲン編集部
●発行 (株)遊行社
●印刷 北日本印刷(株)
〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町5-5-1F
TEL 03-5361-3255 FAX 03-5361-1155
HP <http://yugyosha.web.fc2.com/>
MAIL morgen@vesta.ocn.ne.jp
●配布エリア
・高等学校(全国)
・中学校(北海道/岩手/宮城/福島/群馬
栃木/茨城/埼玉/東京/千葉/神奈川
長野/新潟/山梨/富山/石川/福井/岡山
広島/香川/愛媛/高知/佐賀/長崎/沖縄)
・朝の読書実施校(全国中・高等学校)
・大学・短大・専門学校・サポート校の一部
●月刊紙(毎月1回発行 ※7・8月は合併号)
●定価 年間購読料3,564円(324円×11回)
※一部売り540円(税込)